文献紹介

曽和　信一　著

人権問題と多文化社会

－自立と共生の視点から－

㈱明石書店（１９９６．３）

本書は現代社会における人権と文化をめぐる問題をグローバルな視野から考えていこうとする試論である。その視野は大きく、「人間とは何か」からはじまり、人権思想を捉えなおし、国際社会における人権問題への取り組みを概観する。その上に立って、日本における四大差別問題と言われてきた、部落差別、民族差別、障害者差別、性差別をめぐる問題の所在を明らかにしている。そして、「人権教育と人権文化の課題」を考察し、多文化共生社会をめざして論述を進めていく。

このようなスケールの大きな人権論は、曽和さん自身の生き方から生まれてきているように私には思われる。本書の「まえがきにかえて」には、曽和さんがインドに行かれた時に、カースト制度の最下層に組み込まれ、「前不可触民」と呼ばれている民衆と出会われた経験が記されている。ある事件があって「危険だ」と制止される状況の中で、その地域に入っていかれたのである。この曽和さんの行動力と「無告の民」とも言うべき被差別民衆と共にあろうとするおもいの深さに感銘を受ける。

この本はそのような曽和さんの実践と思索の跡を集約されたものである。そこでは常に、被差別の民衆と歩みを共にしながら、「人間とは何か」ということが尋ね、求められている。人間の本質的属性とは、「すべての人間がもっており、人間をして人間たらしめる人間の本質あるいは本性を指し示す人間性」だと曽和さんは答える。そして、この人間性の具現として水平社宣言にみる「人生の熱と光」に、鹿児島俚諺「唖（むご）の歌」にみる障害者の生き方に注目していかれるのである。ここから被差別民衆の側から人権と文化を捉えかえしていこうとする曽和さんの姿勢が伝わってくる。

本書の副題は、「自立と共生の視点から」となっている。曽和さんは人間性を実現する原理として、「自立と共生」を考えている。これが本書全体を貫くモチーフとなっている。自立については明示的に述べられているわけではないが、「権利の主体としての人間」という表現がある。またヴァイツゼッカーの「誠実」について論及されている。主体的にかつ誠実に自分の生き方を貫くこと、このような自立の思想をこの本から学びとることができたように私には思える。

共生については、カナダでの生活体験をも踏まえて、「社会的に自由であり、権利について平等である人間の人間としての連帯」という形で論じられている。曽和さんは「価値争奪」という概念をよく使われるが、お互いが主体性を大切にしながら、対等な関りをつくりだしていくという共生のイメージは示唆的である。

本書は「希望の世紀に向けて」というエピローグで締めくくられている。本書全体が、読者と「共に希望を語る」（ルイ・アラゴン）旅であったことにここに来て気づかされる。本書を通して、私たちは「人権と文化」という新し

い時代の希望と出会っているのである。

（堀　正嗣）

田中俊也　編著

『コンピュータがひらく豊かな教育』

～情報化時代の教育環境と教師～

北大路書房（１９９６．４）

教育の世界にも、コンピュータという新しい双方向性をもつメディアが積極的に導入され、いつでも、どこでも、誰でもが使える方向で、施策がとられてきている。ニューメディアという言葉が下火になったかと思うと、マルチメディアがクローズアップされ、昨今では通信系つまりインターネットに、興味・関心の重点がなだれを打つようにして移動している。日本教育工学会での発表、各地での研究会、専門書、月刊誌と、どれをとってみても、このようなトレンドの移動が鮮明に読みとれる。

コンピュータがわが国の学校に入るようになって約20年、この間にその利用の仕方、メディア環境、それになによりも拠って立つ学習理論などが、劇的なまでに変化してきた。しかも今日なお学校現場では、この間の新旧の利用法が混在し、旧式と新式の機種も混在し、流行だけが先行し、ということからもたらされる混乱・分裂が広くみられるのである。

本書はこういう実情の中で、世に問われたのである。たまたま同じく関西大学に席を置くということになったが、それは別として、教育工学と教育方法学を撚り合わせたような分野を攻めている私にとっては、見逃すことの出来ない好著といえる。

（１）教室における「教え～学ぶ場の考察」、例えば教育技術の法則化運動、有意味受容学習、発見学習・探究学習、そして社会的構成主義に立つ学習などが、一つの尺度上に位置づけられ、多少の粗雑さはあるが考察を加えられている。そしてこれが、筆者達が現実のメディア環境やそこでの学習の実態を分析し、方向付けをしていくための視点となっている。第２章において、知識論・認識論に踏み込み、「知の社会的構成主義」という編者の立場を明示している。そしてこの立場に立つ具体事例を第７章に配置している。コンピュータ関連の類似書には、こういう視点からの構成や切り込みが欠落している例が多い。

（２）第３章においては、学校の情報化対応の流れが、正確かつ緻密に記述され、わかりやすい図化に工夫を払い、資料としても貴重な価値がある。しかも資料紹介にごく短く、適切なコメントが加わっている。

（３）第４章では、約20年に及ぶコンピュータの教育利用の変遷が、具体例で示されている。初期のCAIから最新のマルチメディア利用まで、外国の事例、全国各地の実践事例、教師の英知の結晶ともいえる富山や東京での活用事例など、ばく大な事例・資料を鮮やかに要約している。若い研究者や教師達には、この章で「実践の流れ」をつかんでほしい。